



ヒノキ材にかんなを当てて、シャトルの形を削り出す伊藤君(左)

伝統の「ろくろ細工」学ぶ

2年の伊藤君授業で上達

蘇南高

南木曾町の細工作りに取り組んで取り付け、大小3種類の伝統的工芸品。ろくろの時間は、南木曾ろくろ細工の職人の授業があった。20回あり、22日に17回目の授業があった。目の授業があった。バドミントン部に所属する伊藤君は10作品目に、シャトルのオブジェ作りに挑戦することにした。直径6・5センチ、長さ13センチのヒノキ材を、木材を回すための機械「木工旋盤」に

男さん(61)「吾妻」の指導を受け、蘇南高校2年の伊藤雄大君(17)が昨年10月下旬から、選択科目「美術研究」の一環でろくろ材を、木材を回すための機械「木工旋盤」に

ようになった」と上達ぶりを褒めていた。小椋さんを講師に招くのは2年目となる。小椋さんは「ろくろ製造・販売店が集う『木地師の里』は町内にあるが、蘇南高校の生徒にはあまり知られていない」と話し「少しでも興味を持ってほしい。受講者の中から将来、ろくろ細工の仕事に就きたいという人が生まれればうれしい」と期待していた。(細野はるか)